

海外特別インタビュー

# エディタ・グルベローヴァ

今年デビュー40周年を迎えたエディタ・グルベローヴァが、「これで最後のインタビューにするつもり……」と言ってチューリヒの自宅に招いてくれた。今秋のウィーン国立歌劇場日本公演では、〈ロベルト・デヴリュー〉（演奏会形式）でエリザベッタを歌うほか、リサイタルも予定されている。等身大の“コロラトゥーラの女王”の現在をお伝えしたい。

取材・文=中 東生 写真=マルコ・ブレッサーノ  
Text=Shtnobi Naka Photo=Marco Blessano



グルペローヴァがエリザベッタを  
歌ったドニゼッティ(ロベルト・デ  
ヴリユー)のDVDが、7月23日に  
ユニバーサル・ミュージックからリ  
リースされる予定(2005年5月パ  
イエルン州立歌劇場で収録)

ドニゼッティはベツリーニと並んでベルカント・オペラの双璧ですが、  
ベツリーニとドニゼッティを区別するならば、私はいつもワインに例えます。  
ベツリーニは濃厚な赤ワインで、彼の旋律は独特の重いラインがあります。  
ドニゼッティは白ワインのような軽快さがありますが、ロツシーニほどでは  
ありません。ロツシーニはさしずめシャンパンです(笑)。

ツエルピネッタ以外は、  
ベルカント・オペラが  
自分の世界だと思っています。

グルペローヴァさんがこのように長  
命な活動を続けてこられた秘訣、美声を  
保ってきた秘訣は何ですか。以前同じ質  
問に「歌い過ぎないこと、頻繁に仕事を  
入れないこと、重過ぎる役を歌わないこ  
と」とおっしゃっていましたか。

グルペローヴァ(以下、G) 今でもそ  
の通りに実践しています。声帯は筋肉で  
す。体の筋肉も使い過ぎると筋肉痛を起  
こすように、声帯をなめるべくいたわって  
あげなければなりません。レパートリー  
も、心が欲する役柄もありますが、最後  
には声帯に聞いて、合わなければあきら  
めなければなりません。例えば(『ノル  
マ』)のデビューがあれば、遅かったの  
は、その証明です。声だけでなく、経験  
を重ね、感情面でも歌う準備が出来上が  
ったと感じられるまでは、オフアがあ  
っても歌いたくありませんでした。デビ  
ューの地に日本を選んだのは、意図的な  
ことでした。あれだけの大役にデビュー  
するには、心が穏やかな状態でいられな  
ければなりません。日本の聴衆には愛さ  
れていると感じていますし、いくら勉強

して準備していても、万が一、何かの事  
故が起こった時、小さなことに目くら  
を立せず、芸術全体を評価して下さる包  
容力が、日本の聴衆にはあると確信して  
いるからです。

公演前はお嬢さんとも筆談をするこ  
う噂は本当ですか。

G それは特別な状況だったと思いま  
す。確かモーツアルトのコンサートアリ  
アを録音中で、何日も続けて歌い続け  
ていましたので、それ以外に、家事のこと  
で話すのは、翌日に声の疲れを残す、と  
判断したからです。でも、今でも仕事が  
重なる時期はなるべく人と話さないよう  
に、電話にも出なかつたりします。

この10年はイタリア・オペラ、ベル  
カント・オペラをレパートリーの中心に  
されていますが、今後ドイツ・オペラあ  
るいはドイツ・リートに戻ってこられる  
可能性は?

G 9月に久しぶりにウィーンでツエル  
ピネッタを歌うのが今からとても楽しみ  
です。もう35年も歌っている役ですが、  
人生経験と共に解釈もどんどん深まって  
いく役でやり甲斐があります。それ以外  
はやはり、ベルカント・オペラが自分の  
世界だと思っています。リートにはつね  
に取り組んでいます。

Special Interview

## Edita Gruberova

ソプラノ





——これまで取り組んだことのないオペラで、今とくに興味のある作品、役柄は何ですか。

G ベルカント・オペラならすべて興味があります。実際、《マリア・デイ・ロアン》《カテリーナ・コルナロー》《ジェンマ・デイ・ベルジー》などは譜面を読んでも、興味をひかれる部分もあれば、退屈にも思える部分もあります。《異国の女》《海賊（イル・ピラータ）》などがいいかしら。でも、「ウ」マークは3つくらいつけておいてちょうだい（笑）。

——現在流行の読み替え演出についてどのように思われますか。

G 今に始まったことではなく、昔からあった問題です。それでも音楽はしっかりとそこに存在するので救われますが……。ただ楽譜もわからないような演出

家が、CDのブックレットを片手に舞台稽古に来て、自分を誇示するために音楽をながしるにしたら、私は指揮者同様戦います。一番大切なのは音楽だ、と。幸い、ベルカント・オペラは、演出家にとつてあまり深く掘り下げる事ができないようなので、被害も少ない気がしますが、そのような問題を避けるためには、演奏会形式での上演もよい解決策です。

——現在の音楽界、オペラ界に欠けていること、希望することは何でしょうか。

G 問題点はその演出についてくらいです。つねに音楽の原点に戻ることが大切です。才能のあるよい歌手は現在もたくさんいるのですから。

**障害さえ乗り越えられるということが、本当のキャリアなのではないかという気がしています。**

——今秋、ウィーン国立歌劇場の日本公演で《ロベルト・テヴリユー》を歌われますが、エリザベッタという役の魅力、音楽作り、役作りの難しさは何ですか。

G 私は16世紀の英国の歴史が好きで、エリザベッタの父親のことからすべて勉強しました。その上で、エリザベッタの長い統治時代における強さ、女王然としたところなど、共感できる部分がたくさんあります。実際舞台上立つ前の準備は大変でしたが……。一曲目のアリアも難しいですが、やはり頂点は最後の場面だと思えます。女としてのエリザベッタとイギリス女王としての彼女の両面が表されています。それだけに、声にもさまざまな色合いを必要とするところが、難しいと言えるでしょうか。

——ドニゼッティのオペラの魅力、他の

イタリあの作曲家のオペラと比べて際立っている点は何ですか。

G ベッリーニと並んでベルカント・オペラの双璧で、彼らが存在していたことに感謝します。そうでなければ、私は歌うものがなくなってしまうもの（笑）。ヴェルディの先駆者として音楽史上で果たす役割も大きいと言えるでしょう。強いて、ベッリーニとドニゼッティを区別するならば、私はいつもワインに例えます。ベッリーニは濃厚な赤ワインで、彼の旋律は独特の重いラインがあります。比べてドニゼッティは白ワインのような軽快さがありますが、ロッシニはほどではありません。ロッシニはさしずめシャンパンです（笑）。

——日本公演のアンサンブルの聴きどころは何ですか。

G 今までによく共演した人たちなので、離れていた家族にまた会えるような感覚です。プロストとフロントーリはいろいろな場所で共演していますし、クラス・テヴァはウィーン国立歌劇場での《フルマ》で共演しました。息の合ったアンサンブルになると思います。

——演奏会形式にされたのはクルペローヴァさんの選択ですか。

G 3演目を引っ提げて訪日するというところで、技術的にも無理があるという劇場側の決定でした。演奏会形式では音楽に集中し、心の中で起こっていることを感じながら伝えられるという利点もあります。個人的には、このオペラの特に最終シーンはかつらを脱いだ女王が、ふけた本来の姿を晒す、などの視覚効果も高いので、演奏会形式になったのは少し残念ではありますが、日本の皆さんはいつ

も、用意周到に勉強なさってからいらつしやるので、視覚効果抜きでも感情が伝わりと確信しております。

——ウィーン国立歌劇場に出演した際の思い出について最も成功した公演、一番心に残るステージは何ですか。

G 22歳の時、最年少で契約しましたが、やはりベームに認められて抜擢された《ナクソ島のアリアドネ》でしょうか。それから、イタリあのものでは《ランメルモールのルチア》でのデビューが心に残っています。

——そのような歌手としての過渡期に、2人のお嬢さんをご出産なさったわけですが、キャリアとの両立など、不安はありませんでしたか。

G 計画を立てていたわけではなく、流れに任せていたのですが、不安はありませんでした。私は人生のプランを立てませんでしたし、今から振り返ると、基本的には両立は不可能なのかもしれない、とも思います。でも、両立できていたからこそ、今までやって来られたのかもしれない。片手間というか、限られた時間の中で懸命に勉強しましたから。子供たちが学校に行っている間に、ササッと勉強してしまい、帰って来たら、母親の役割をこなせるように時間配分していました。そうは言っても、子供たちにはそれなりの犠牲を強いとは思っています。母親と一緒にいたくても、「ゴメンね、今日は勉強しなきゃ」と言わざるを得ない場合も多々ありましたから。いま振り返ってみると、子供を持たずに同じようなキャリアを積み重ね、実はキャリアの半分しか達成していないように感じます。



## ルツェルンの聴衆を興奮の坩堝へと誘ったリーダーアーベント

3月27日、ルツェルンのKKLにグルベローヴァ・ファンが結集した。彼女が畏怖を抱くというモーツァルトの歌曲で始まったリーダーアーベントは、独、仏、伊語と移るにしたがって、柔らかさが出て来たが、初めからピアノシモの極限にまで挑戦し、聴衆を引き込んでいた。次のシューベルトの歌曲では独語を明瞭に聴かせ、子音で遊び、逼り気味なホルンメントも、彼女の表現の中では許容できてしまう。《糸を紡ぐグレートヒェン》でクライマックスを迎えた前半の最後は《岩の上の羊飼ひ》で、チューリヒ歌劇場の名クラリネット奏者、ピックアップとピアニストのハイターと共に室内学的歌唱を聴かせてくれた。

後半はドヴォルザークの「8つの愛の歌」で始まり、水を得た魚のような自由さが感じられた。チェコ語で歌う時、彼女がいつも選ぶ母音の独特の響きがピッタリとはまる。そして最後にシュトラウスですべてのプログラムを終えた後、アンコールの《ヴィラネッル》でコロラトゥーラが解禁になると会場は興奮で総立ちになった。そして《我ら可哀想なプリマドンナ》で彼女のコミカルな部分が全開、聴衆の興奮が頂点に達して終演となった。(中 東生)



### 【エディタ・グルベローヴァ来日公演情報】

ウィーン国立歌劇場日本公演～ドニゼッティ  
《ロベルト・デヴリュー》(演奏会形式)

〈日時〉10月31日18時30分・11月4日18時30分・8日15時〈会場〉東京文化会館(3日開とも)〈出演〉エディタ・グルベローヴァ(エリザベッタ)、ナディア・クラステヴァ(サラ)、ホセ・プロス(ロベルト)、ロベルト・フロンターリ(ノッティンガム公爵)、フリードリヒ・ハイター指揮ウィーン国立歌劇場管〈問合せ〉日本舞台芸術振興会03-3791-8888

### リサイタル

〈日時・会場〉11月13日19時(サントリーホール)、27日19時(横浜みなとみらいホール)〈曲目〉モーツァルト(ドン・ジョヴァンニ)～「あの人でなしは私をおどむき」、イドメネオ～「オresteとアイアスの苦しみ」、ドニゼッティ(シャモニーのリンダ)～「この心の光」、ベッリーニ《海賊》～「その汚れない微笑」と他〈共演〉ラルフ・ヴァイケルト指揮東京交響楽団〈問合せ〉日本舞台芸術振興会03-3791-8888

「いつまでも若い娘役を演じられるために、何か特別なことをしていますか」  
G 私が思うに、音楽は人を老けさせません。私もまだ若いつもりですが、ドミンゴやヌッチを見てご覧なさい。あとは、つねに向上心と探究心を持ち続けていることも若さの秘訣かもしれません。例えば、私は2年半前に、発声上の新しい発見をしたのです。偶然ある人が見せてくれたテクニクなのですが、40年弱も歌い続けていても、まだ新しいことが見えて来るといふ世界なのです。

「具体的には、声の支えですか、呼吸法ですか、それとも別のものですか」  
G ……秘密をバラしてしまつと、声を支える位置です。ドンと下に降ろす感じで作つてみたら、大変具合がいいのです。いまは大変満足しています。

「それは、年齢と共に必要になった技術ということではなく、40年前に知つていたとしたら、実践していますか」  
G もちろん。それをもっと早く知つていれば、現在ももっとすごい歌が歌えていたのに、と思います。だから、レッスンは若い人たちに早いうちからその技術を伝えるようにしています。

「最近4人目のお弟子さんを取られたそうですが、多忙な中でレッスンをすることはグルベローヴァさんにとってどんな意味があるのでしょうか」  
G 人に教えるということは、それで自分も試験されているようなものです。自分の勉強、経験にもなるのです。私の場合、定期的にレッスンをするのは時間的

に不可能ですが……。

「グルベローヴァさんにとって一番大切なものは何ですか」  
G 誰にとっても一番大切だと思うのは、健康です。いつもいつも、荷物をまとめて、旅をして、ホテルだ、飛行機だ、タクシーだ、とうんざりすることもありませんが、それができるのは健康だからで、いくらしたいと思つても、健康でなければ実現しないことなのだなあ、と気が付き、神に感謝しています。

「そんなストレスフルな生活の合間で、リラックスするためになさる趣味は何かありますか」  
G (庭を指して) ガーデニングです！

「これからの夢は何ですか」  
G 歌うのを辞めることです(笑)。ドニゼッティは全部で57曲のオペラを作曲したのに、(スコアを本棚に数えに行つて) 私はまだ7つしか歌っていないし、ベッリーニを合わせると、相当の数にな

「夢は歌うのを辞めることです(笑)」

「素敵なお話をありがとうございます」



インタビューは6月14日、チューリヒにあるグルベローヴァの自宅で行われた。